

☆主に「わが生涯を生きる」よりエマの接触した人物、事件等の印象、感想、意見を集録した。

ルイズ・ミッシェルの印象

わたしが英国を訪れた目的の一つは、アナキスト運動での知名人に逢うことでした。運悪くクロポトキンが街にいて、わたしが来たあと戻ってくるとのことでした。エンリコ・マラテスタは街にいました。わたしは彼の小さなお店でみつけたのですが、誰も通訳して呉れる人がなく、わたしはイタリア語が判りません。でも彼の親切な微笑は気心の知れた個性を映しだしていて、旧くからの知りあいのような気持を覚えました。ルイズ・ミッシェルにはここへ着てすぐ逢いました。わたしの滞在したフランスの同志達は、ロンドンで最初の日曜日に歓迎会の手配をして呉れた。その間ずっとパリコミューンについて読み、その光栄ある発端と恐ろしい結末は知っていました。ルイズ・ミッシェルは彼女の人類愛において崇高で、熱情と勇氣では立派でした。彼女は骨ばってやつれ年より老けていました。(六二才にしかなくていなかった)でも彼女の眼には精神と若さがあつたし、ほほえみはすぐわたしの心を捉えた。当時この人はパリの敬愛すべき暴動の残酷さを生き抜いてきたのです。その激動は労働者の血の中にコミューンを沈め、パリの街路を数千人の死者と負傷者で埋めました。それだけでは納まらないで、ルイズ・ミッシェルまで手が伸びました。幾度となく死に遭遇したのです。

ペール・ラシエーズのバリケード上で、コミユナードのしんがりで、ルイズはいつも最も危険な地位を選びとってきました。法廷では、同志達の刑量と同じ犯科を要求し、女性のため有利になるのは軽蔑した。運動では喜んで死ぬ気でした。この英雄的な姿を恐れたのか畏敬したのか、パリのブルジョワジーは彼女を殺害できなかった。ニュー・カレドニアの刑務所でゆっくり死なせようとしたのです。でも彼等はルイズ・ミッシェルの我慢強さを考慮して、同囚に対する彼女の献身と奉仕を考えてもみなかった。ニュー・カレドニアでは、流刑者達の希望であり鼓吹者になったのです。病氣の際は看護に励み、落胆の際は勇気づけました。コミユナード（パリコミューンの際の革命支持者）に對する恩赦にあたって、ルイズは他の仲間と共にパリへ帰ったのです。彼女はフランスの大衆のアイドルになりました。人は彼女のことを「ルイズかあさん」とか「いい女」と呼びました。

流刑から帰って間もなく、ルイズは失業者のデモの先頭に立ち、傷病者の広場へ向いました。数千人の人びとが長い間失業し、飢えていたのです。ルイズはデモの団をパン店へ導き、そのため逮捕されて五年入獄しました。法廷で彼女は、飢えた者がパンにありつくのは、例え「盗んでも」その権利があると擁護した。この裁判でルイズに最大の打撃になったのは、愛する母の死でした。彼女は熱愛していたので、今や革命以外に生き甲斐になるのは何もないと宣言したのです。一八八六年、ルイズは赦免されたが、国家から恩恵を受けるのは拒絶した。自由になるのにも、彼女は無理矢理刑務所から連れ出されたのです。

アールの大集会において、ルイズが講演している所、誰かが二発狙撃しました。その一発は彼女の帽子を打抜き、別の一発は耳の背後にあたった。非常に苦痛な手術だったけど、ルイズは訴えなかった。それどころか部屋に残してきた動物のことや次の街で彼女を待っている女友達のことを心配し

たのです。彼女を殺そうとした男は、司祭にそそのかされて犯行に及んだのですが、ルイズはその男の釈放のために努力を払いました。彼女は有名な弁護士を襲撃者のために依頼し、彼を弁護するのに自分で法廷に立ったのです。彼女の同情は、特に彼の娘にむけられ、彼が入獄すればその娘は父なし子になるとしました。ルイズのかような働きかけは、狂信的な狙撃者を影響せずにいませんでした。

その後ルイズはウイーンの大きなストに参加したのだが、リヨン駅で汽車に乗り込もうとしていて、逮捕されました。フルミイでの労働者の虐殺の責任者である一閣僚が、ルイズの力を恐れ、打倒しようとは何度も試みました。彼はルイズを刑務所から出し、危険で気が狂っていると、精神病院へ送るよう要求したのです。この酷い計画に抗して、同志達がルイズに英国へ渡るようすすめました。

フランスの大衆紙は、ルイズを女らしさや魅力のない（赤い処女）、野獣として描いた。息をひそめるようなもつと酷いことを書いたものもある。けど彼女を恐れ、彼等は空っぽの頭や心では計れない立派な女として、畏敬もしているのです。わたしは彼女の傍に坐っていて、どうして人は彼女に魅力を見とめないのか不思議でした。実のところ、自分を全くかまわない女性をこれまで見たことがなかったのです。彼女のドレスは古ぼけて居、ボネットも古臭いものでした。身につけているのはすべて以合わないものです。けれど彼女の全体が内面の光で輝いていました。力強さの溢れた彼女の輝やかな個性、子供らしい単純な動作、こうしたもので人はすぐ彼女のとりこにされてしまう。ルイズと過したその日の午後は、わたしの生涯でそれまでになかった経験でした。彼女と手を握り、またわたしの頭に手をあてて呉れ、やさしい言葉と親しい同志愛は、わたしの魂を昇化させ、彼女の住んでいる美の領域へつれて行きました。

〔訳註〕 *1 エマが一八九五年九月頃、ウイーンで看護学を学ぶため渡欧して、ロンドンに

立寄った際の印象。

*2 ルイズ・ミッシェルは一八三〇年五月廿九日、ヴロンクール館に、主人と召使女の間生まれる。一八五三年、オーデロンクールに自由学校を開き、後、パリへ移る。ここでジャーナリズムに活躍、詩文をユーゴに見せる。思想は共和主義から、パリコミューンを経てアナキズムへ転向。

P・クロポトキンの印象

ピーター・クロポトキンとは、ロシア皇帝の王座を継ぐルーリク家の直系にあたりました。けれど彼はその名譽と富を、人類の運動のため放擲したのです。それ以上の事をしました。彼はアナキストになってからもアナキストの思想を発展させ、解釈することに身を挺して、輝やかしい科学者の生涯を捨てたのです。彼はアナキスト・コミューンニズムの代表的人物、明解な思想家、理論家でした。友人の敵から、一九世紀最大の精神的個性の人物のひとりと目されています。クロポトキンの住んでいるブロムレイへの道すがら、わたしは不安になりました。もしかしてピーターは近よりがたく、普通のおつきあいをお願いするには、仕事に没頭しておられるのではないか。

でも一緒にいて五分も経つと落着きました。ご家族は外出中で、彼はわたしを丁寧にまた親しく迎えて呉れ、くつろがせてくれました。お茶はすぐ用意できる。その間自分の大工小屋と自分の手作りの作品を見て欲しいとのことでした。それから書齋へ案内され、彼は自分で作ったテーブル、長椅子、棚などを誇らかに指し示しました。そういつたものはごく単純でしたが、彼は賞揚するのです。それは彼がいつも言う精神活動と肉体的努力の組合せの必要を表わした労作でした。それからその二つがどんなによく混和されるものか語りました。科学者で哲学者であるP・クロポトキンは、自分の手で作ったものについて、どんな職人だつてもでない程の愛情と敬意をもっていました。彼が自分の労働所産を喜ぶのは、大衆の創造能力と生きざまに燃えるような信頼を持っていることを象徴するのです。

クロポトキンは自分で用意したお茶を振舞った後、わたしにアメリカの状況、運動のこと、サーシヤ(A・ヘルクマン)のことを訊ねました。彼はサーシヤの事件を追ってすべてを知って居、大きな関心をもっていると言いました。わたしは彼に英国の印象を語り、それが政治的自由と歩調を合わせて、貧乏と極端な富の間にコントラストがあると語りました。それは大衆をなだめるために骨を投げ与えるようなものではないでしょうか。彼はこのわたしの考えに同意しました。彼の言うのでは、英国は民衆を飢えさせないための必需品を生産するのではなく、売買に従事する商人である。英国のブルジョワジーは、不満の拡がるのを恐れる十分な根拠をもっている。そこで、政治的自由がその最善の防衛策なんだ。英国の政治家は抜けがないのだ。彼等はいつても政治的手綱を締めつけ過ぎないよう加減している。普通の英国人は自分が自由だと考えるのが好きなのだ。それが不幸を忘れさせるのです。しかしそこそ英国の労働階級のアイロニーと悲しみなのです。もし古くからの崩れがかつ

た貴族が専有している広大な土地が解放できたら、英国では男・女・子供のすべてを養えるのです。P・クロポトキンを訪問してわたしが確信したのは、本当の偉大さは、いつでも単純さと組合わさっていることでした。彼はその両者を示現していました。彼の温情と組合わさった彼の心の流動性と輝やかしさは、魅力的でやさしい個性の調和的な全体を形づくっているのです。

*一八九五年九月頃 P・クロポトキンと初めて逢った時の印象。

アムステルダム大会

この会議で長く討議された重要な課題は、組織の問題だった。幾人かの代表は、「民衆の敵」にあるストックマン博士にみられるイブセンの思想を非難した。彼等はP・クロポトキンの著作にみえるものの見方、つまり相互扶助と協働が最良の結果をもたらすのだとして賞揚したのです。マックスとわたしはその両方の必要性を強調しました。アナーキズムはクロポトキンとイブセン間での選択を含まないという意見です。両方を包含するのです。クロポトキンは革命に至る社会条件を徹底的に分析したが、イブセンは人間の魂の革命において頂点に達する心理的闘争、つまり個人の反逆を映し出したのです。わたし達の理念にとって、外面に及ぼす内面の効果、既存の諸制度に及ぼす心理的動機と要求を無視する事ほど災難になるものは他にないと主張しました。

ある方面では誤った観念、つまり組織が個人の自由を拘束しないと言われている。つまりそうではなくて、それは個性を駄目にすると言うことである。しかし、現実では組織の本当の機能は、人格の発展と成長を支援しなければならぬ。丁度、動物の細胞が相互の協働によって、完全な有機体の形成にあたって隠れた力を発揮するように、他の個人との協働の努力によって、発展の最高形態が獲得できるのです。真の意味における組織とは、無実体の単なる組合わせからでてくるのではない。自覚的で知的な個人によって作られるのです。実際、ある組織の可能性と活動の総和は、個々の活力の表現のなかに示されます。アナーキズムは、懲罰、恐怖、そして貧困や圧迫のない、ひとつの組織の可能性を肯定する。即ち新しい社会組織であり、生存手段としての闘争―人間の優れた素質を損い、社会的隔差（深淵）をいつまでも払げる野蛮な闘争を終えんさせるのです。つづめて言えば、アナーキズムはすべての人のための福祉を確立する社会組織にむかって努めているのです。

*この大会は一九〇七年八月廿四日―三十一日に亘って、主としてベルギー及びオランダのグループの発議によって開催された。約八〇名の代表が、ヨーロッパ、アメリカ、ラテンアメリカ、日本から参集。議事進行をマラテスターが受持った。(この項G・ウッドコック著「アナーキズム」P249より)

エンリコ・マラテスター

この大会に出席したフランス、スイス、ベルギー、オーストリア、ボヘミア、ロシア、セルビア、ブルガリア、オランダ等の代表はみな生きいきとした能力のある人びとでしたが、中でもきわだったのがエンリコ・マラテスターでした。優れた感受性をもつマラテスターは若い頃から革命の理想をもっていました。その後、バクーニンに逢い、そのサークルでは一番年少で、ヘベンジャミンの愛称を貰っていたのです。沢山なパンフレットを書き、イタリアとスペインで流布され、多くのアナキストの出版物の編集人にもなりました。彼の文筆活動は、労働者の日常闘争への参加を妨げなかった。一八七七年イタリアのベネヴェントの蜂起の際は、カルロ・カファイエロ、ロシア革命家セルギー・ステプニアーク（クラヴチンスキー）と共に、重要な役割を果たしました。彼の興味は生涯を通じて民衆の反乱の中に一条の赤い糸のように貫通しているのです。スイス、フランス、英国、またアルゼンチンや故国でも、蜂起の時はいつでも民衆の援助に赴いています。全生涯が嵐と衝撃であり、彼の活力と並外れた能力はアナキストの運動に捧げられたのです。けれど運動においての彼の仕事は何んであろうと彼は物質的に独立すべきであり、生活費は手工労働で稼ぐべきだと主張し、それが彼の生活信条でした。父から相当の遺産―イタリアで土地と家屋から成っていた―を何の報酬も受けず、それ

ぞれそこを受持っていた労働者に譲り、自分は自分の手で稼げるだけの質素なもので生活したのです。彼の名はラテン諸国でよく知られ、敬愛されていました。

わたしはこの偉大なアナキストに一八九五年ロンドンで僅かな時間逢いました。（本書のP・クロボトキンを訪問の項参照―訳註）それから米国では演説旅行をして居、イタリア系のアナキスト紙《社会問題》を編集していたのも知っています。そこであるイタリアの愛国者に狙撃されたのですが、彼は襲撃者を告発するのは取止めました。アムステルダムでわたしは始めて日常的に彼と付合ったのですが、すぐマラテスターの魅力にとりつかれてしまった。わたし達は世界の重圧をはねのける点で同調し、余暇を共に遊びました。彼と一緒に過すのは楽しく、海をみてはしゃぎ、公園で戯まれるのでした。

この大会の最重要な成果は、国際局の設置でした。書記局はマラテスター、ロッカー、シャピローが受持った。局の目的は、主軸をロンドンに置き、諸国のアナキストグループ及び組織を緊密に接触させ、各地の労働運動を徹底的且つ苦心して研究し、それに関する資料をアナキスト各紙に提供することでした。また局は次の大会を近い将来、ロンドンで開く準備にとりかかりました。

アナキズムとテロリズム

（一九〇一年九月六日 バッファローにおいて米国第二五代大統領マツキンレー（一八七七年—一九〇一年）がボーランド系米人 レオン・クゾルゴス（Leon Czolgoz）によって銃撃され死亡した。彼はアナキストを名乗りエマの遊説先で彼女に逢ったことがある。この為、彼女は共同謀議の嫌疑をかけられ、自白を強いられたが、言論の自由として闘い抜く。アナキストに対する民衆の憤激を利用して、マツキンレーの治下では副大統領だった、テオードル・ルーズベルトが次期大統領になると直ちに「アナキシー法」を制定し、これが一九一九年、彼女の国外退去の遠因になった。

クゾルゴス青年は自己の行動を「労働民衆のためにしたのだ」と正当化したが、一八九〇年代にA・ベルクマンのフリック襲撃により、個人的テロを経験していた彼女の反応、また獄中にあるベルクマン自身の批評をあげる。」

…なぜ彼（クゾルゴスのこと）は、経済的抑圧や不幸の原因を担っている直接の代表でなく、大統領を対象に選んだのだろうか。彼はマツキンレーの中にウォール街や新しいアメリカの帝国主義の開花を看取ったのだろうか。マツキンレーの治世でとられた第一歩は、米西戦争で自由のために闘っ

た米国民を裏切りフィリピンを併合したことだった。それに労働界の敵対と反動的立場を強めたことで、ストライキをする地方に軍隊をさしむけていた。こういった事柄が感じやすいレオンに影響し、遂に彼の暴力行為に結晶化したのだろうか……わたしはそう思いました。

わたしは「大地」誌に「バッファローの悲劇」と題して書きました。

「レオン・クゾルゴスや彼と同じタイプの人びとは、本能の卑しい墮落した人びとと異り、大きな社会的ストレスに耐えない程、過敏な人であるのが実相である。さような人びとは自分達の生命を犠牲にしても何らかの暴力的表現に駆られる。なぜなら同胞の不幸や苦しみをみるに耐えないからである。だからさような行動を非難するなら、この世界を支配している不正と非人間性に責任をもつ人びとの家のドアにこそ非難を貼出すべきである……」

わたしは幾つかの社会的原因を指摘したあとで次の言葉により結論をつけました。

「わたしはこう書きながら、あの娘のような顔付きをした若者が、死に就くとて、独房を歩き廻るのがみえるようだ。その後姿を残酷な眼が追っていく……」

彼が涙を流そうとしても

祈ろうとしても

凝つとみている者がいる

刑務所から 奪われないよう

彼を見守る者がいる

わたしの心は深い同情をもって彼に赴く。抑圧され不幸に悩む犠牲者の許へ、よりよい高貴な生を

求めて散った過去と未来のすべての殉教者達の許へ。」…

〔十二月廿日付でサーシャがこの事件に対し批評を書き送り、エマは彼の「襲撃」に対する考えの変化に驚いた。〕

「…もし新聞が民衆の感情を映す鏡だとすれば、この国（アメリカのこと）は当然、人喰い主義に陥つたようである。ぼくはきみ自身（エマのこと）の生命のこと、そして逮捕された同志達の安全がもつとも心配だ。…でもきみの自尊的誇らかな態度、驚くべき自制は有難い。特にきみがあの傷心の青年（クゾルゴスのこと）を忠実に看護すると言ってきたのには感動した。あの男は、可哀そうにみながら死刑を宣告され、見捨てられているんだ。きみの同情と援助は死んだ大統領以上に必要だし、それに価するんだ。きみの手紙でもっと驚くべきことは、年月と共にぼく達に大きな変化がきて、それをぼくに認めたことだ。そうなんだ。ぼく達二人の中に…だけどぼくの心はきみの美しい感情が響いている。一〇年の月日で、一つの思想がぼく達に不可能になった！ ぼく達はそれを革命精神への裏切りとみなすべきだろう。つまり資本主義の公務員の人間性を認めるのは、ぼく達の伝統にとつて冒瀆だろうと言うのである。ぼく達二人…きみはアナキストの思想と活動の中心にいて、ぼくは絶対的抑圧と孤立の中にいる—がそれぞれの異なる道で一〇年を過した後、同じ転機に到達したのは、意味のあることではないだろうか！」

「…ぼくはあの若者の美しい個性、彼が野蛮な条件に自己を適応させ得ないこと、それに彼の魂の

反逆について読んだ。それが「襲撃」の原因について幾つかの光をあてたのだ。高貴な男女が、その魂は厭がつているのに、人間の血を流さざるを得ないよう仕向けられるのは、殉教の偉大な悲劇であり、社会への恐るべき告発である。重要なのは、この種の強烈な方法は、最後の極端な手段としてだけ訴えるのでなければいけない。その価値を証明するには、個人的な必要性より、社会的な必要性によって動機づけられ、民衆の直接、即時の敵に対して向けられるのでなければならぬ。さような行動の意味が民衆の心によって理解される時、その時だけ「襲撃」の宣伝的・教育的意味があるのだ。それ以外だと、全くテロ行為でしかないのである。」

「…ぼくはレオンの行動がテロだとは認めないし、教育的かどうか疑っている。なぜならその実行に社会的必然性があきらかでないからだ。きみが誤解しないように、ぼくは繰返して言う。テロは個人的反逆の表現としてやむを得ないのであり、それ自体で現存の条件の告発である。しかし社会的必然を背景としていなければ、その行為の価値は大巾に無化されるのである…。」

「…政治的屈従の陰謀がアメリカに健在である。マツキンレーはわが近代的隷属の首長的代表だが、民衆の直接・即時的敵とは考えられない。絶対主義なら専制君主は明瞭で、確実だ。共和制の本当の専制は、はるかに深く、もつと内部に巢喰っているのだ。それは自治や独立の民衆的幻想に依りかかっている。それが民主主義的暴虐の源泉で、そういうものとして銃弾さえ受け付けないのだ。近代資本主義では、経済的搾取が政治的圧迫より、民衆の真の敵である。政治は経済の下女にしかすぎない。それ故、ぼくは自分の行動が、レオンのより意味があり、教育的だとみなすのだ。それは明白で真の

圧迫者として民衆の眼に、よりはっきり認められた者に向けたのだから……」

〔訳註〕

*一八九〇年代はヨーロッパでは「世紀末」の風潮があり、それがアナキストにとっても「ブルジョワ社会の終り」を意味した。一八八六年にはパリ、リヨンで爆弾騒ぎがあり、同じ年の五月四日、シカゴでヘイマーケット事件が起きている。これは労働者のデモに警官が発砲し、爆弾が投げこまれ混乱になった。その結果、七名のアナキストが逮捕され、裁判は道化で、民衆の憤激を利用して当局は、スパイス、バルソン、エンジェル、フィッシャの四名を死刑に処した。エマとベルクマンのアナキズム運動はこの事件に原点をもっている。

*一八九二年にはラバシヨルが無差別の爆弾事件を起し、九三―九四年にはスペインで、サンチャゴ・サルバドルが友人で処刑されたパラスのために投げ、フランスではオーガス・ト・ヴァイアン、またこのヴァイアンに見習ってエミリー・ヘンリーがカフェで投弾、一八九四年五月廿一日、上告を拒否して処刑されている。

*この一連の爆弾と暗殺の直接行動は、アナキストがテロリストだとの印象を民衆に植えつけ、アナキズムが、事実は社会のスラムと差別への反抗からでているのを忘れさせる働きをした。またアナキストの直接行動は国際的なものだとして諸国の政府は一例えばクロボトキンとその首領と擬するような次第であった。心理学者ロンプロゾは、アナキストの暗殺は間接的自殺である。エミリー・ヘンリーやカセリオの暗殺は世界に絶望し、自分の生命を奪う勇気もなくして殺人を犯したのである。それは処刑されることで、人生の異常で反自然なのを拒否する意味があつた、としている。

*支持するアナキストの言論に次ぎのものがある。「エミリー・ヘンリーは間違っているかも知れない。しかし彼等は誠実である。運動のために自己の生命を投げだす程、人間にとって誠実を証しするものが他にあらうか。ラバシヨル、パラス、ヴァイアン、ヘンリーはみなそうだった。

われわれは金持ちに言おう。もしこれらの人びとが怪物なら、それを作ったのは君達である。きみ達は民衆を大量に思うまま殺害している。その血が復讐を求めたからとて驚くにあたらないのだ。富と権力を得るため無実の人間を殺す権利があるだろうか？だとすれば無実の人間を殺した責任者を殺すのは正当だ。それは誰の責任だ？労働者から盗み、殺して安逸を食はるものにあるのではないだろうか？

わが近代の文明は、殺した奴隷の身体の上に建立されたモーロク（軍神）の神殿である。テロリストには好きなようにさせろ。彼等はわが主人の犯罪に匹敵しないのだ。」

*A・ベルクマンの転機はこのコンテクスト（文脈）の中でみると、意味をもつだろう。既にクロボトキンとマラテスタは「危険な道化」には反対で、アナキストは変革を目的とし、無差別の破壊ではないとした。しかしこれは当時ラバシヨルほどの人気がなかった。

*クロボトキンの意見は次ぎの通りである。事実、われわれは迫害によって彼等（テロリストのこと）ほど苦しんでいない。労働者は苦しんでいるのだ。ところがわれわれは家にいて、人間の苦しみの声や光景からは除外されている。とすれば苦しみの地獄の真只中で生きた人びとを批判することはできない。」

「……個人的にわたしは爆発は厭わしい。だが絶望に駆られた人びとの批判には立てない。」「……只一つのこと——復讐は理論に昇化できない。人は他人にそれをするようけしかけることもできない。だがもし彼が地獄を鋭く知覚し、絶望的行動に出るなら、その人への批判

は同じだけ苦しんだ者、同じだけ耐えた人によってさせるべきである。』

「暴力はすべての党派にある。そして他の手段に信頼を失い、絶望している。』

「：あらゆる党派の中で、現在私は唯一の党―アナキスト―をみているが、これは人間の生を尊重し、死刑の廃止、人間による人間の、刑務所での苦しみと処罰の廃止を声高く主唱している。他の党は、日常で人間の生を尊敬しないでいいと教えているのだ。敵は殺せ、刑務所で死ぬまで敵を苦しめよ、これがその教義である。株券保持者の利益のため、彼等は鉱山で鉱夫を殺し、列車の中で乗客を殺し、アレキサンドリアで爆弾騒ぎを起し、街路で女子供を殺している。彼等は教義の成果を収獲しているに過ぎない。人間の生の神聖はどうだろう。あらゆる手段を尽すべきである。しかし社会がまず、人間の生の神聖さを認めるべきで、その反対を教えてはならない。』

*和田久太郎、古田大次郎の事件を知悉していた中国の作家・アナキスト巴金（バーチン）は、一九二〇年代のエマに手紙を送り、ベルクマンとフランスで面識もあった人だが、この主題について発言している。彼はまずテロの意味を二つに分ける。一八七〇年―八〇年代のロシアのテロは「生命には生命を」である。それは自衛であった。これに対し古田大次郎は「愛のために殺す」である。ロプシンの「蒼ざめた馬」では何故殺すかと訊ねられ「わたしは愛のために生きる力がない。けれど愛のために死ぬことができ、死なねばならぬと知っている」とある。

「：彼等は飲んで酷い困難にむかい、自分の生命と幸福を、未来の人間にとって愛のある世界を創出するために捧げるのだ。彼等の爆弾が役に立たなかったとしても：その立派な個性を認めず、血と涙で作られた情緒は最も美しいと認められないのだろうか？ これらの優れた人びとはその活力を建設的仕事に活用できず、感じやすい年令で死刑台に登らな

ければならなかった。テロリストの多くは廿才代であった。われわれは、さような状態を許す社会は、変革すべきだと言えないだろうか？」

「：テロリズムは社会の犯罪によって、作られる。現在の社会が存続する限り、大衆は苦しみ、少数者がよい生活を楽しむ限り、テロリズムは避けられないのだ。：私はテロに反対だ。しかしテロリストには大きな敬意をもっている。私はテロ活動を擁護し宣伝するのは反対である。またテロをアナキズムと同一視し、アナキズムの実現方法とするのは反対である。アナキズムの実現は、組織された大衆運動によってのみ達成される。テロ行為はアナキズムに大きな利益にならない。それ故、私はテロリストが革命的仕事にその活力を用いるよう希望する。みなが大衆運動と一緒に働かなければならない。これこそ勝利をもたらす本当の仕事なのだ。：」

巴金の発言は一九二〇年代の中国で未だマルキシストの勢力が弱く、国民党による暗殺が横行していた際のものである。

幸徳事件

「エマはその主宰する『大地』誌において、日本で幸徳伝次郎（秋水）の大逆事件が起